

# 嫁が憎いの、姑が憎いの

佐藤 俊明

徳川時代、盤珪永琢（一六二二——一六七三）という人がおった。不生禪を唱えた禪僧として有名であり、大正眼国師と諡おくりなされた高僧でもある。この人は仮名法語でわかりやすく禪の真髓を説いているが、その中にこんな教えがある。

嫁が憎いの、姑が憎いのと、よくいわっしやるが、嫁は憎いものではないぞ、姑も憎いものではないぞ、嫁があの時ああいうた、この時こんなきついことをいわっしやった。あの時あんな意地のわるいことをしなさったという、記憶が憎いのじゃ。記憶さえ捨ててしまえば、嫁は憎いものではないぞ、姑も憎うはないぞ……。

まことにおもしろく、またわかりやすい説明だが、では、知識や経験の記憶を捨て去った心のすがたはどうであろう。これもまた盤珪永琢の言葉によると、人間の本性というものは鏡のようなものじゃ、本来何も無い。ものがくれば映るが、鏡の中に生じたものは何も無いぞ。ものが去れば消えるが、鏡の中に滅したのも無い。鏡の中は生ぜず、滅せずじゃ。また、きたない犬の糞を映したからとて、鏡はよごれはせんぞ、きれいな花を映したからといって、それで鏡がきれいにはならんぞ。鏡の中はよごれず、きよからずである。重いものが映ったからといって、鏡の目方は増えやせん。軽いものが映ったとて鏡の目方は減りやせん。鏡の中は増さず減らずである。『般若心経』に、不生不滅、不垢不淨、不増不減とあるのは人間の本性を謳ったものじゃ……。

実にわかりやすい説明である。

「続・二つの月」より

